

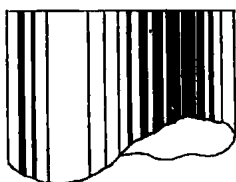
比較文学の諸相

福田陸太郎



比較文学の諸相

福田陸太郎



大修館書店

福田陸太郎（ふくだりくたろう）

1916年石川県生まれ。東京文理科大学英文科卒。ソルボンヌで比較文学専攻。現在日本女子大学教授。東京教育大学名誉教授。日本比較文学会会長。国際比較文学会理事。オーストラリア・ニュージーランド文学会会長。インディアナ大学、シラキュース大学等客員教授。日本ペンクラブ理事。

著訳書には、『西洋の影の中で—比較文学論考』（ELEC 出版部）、『遠い国 近い人—欧米作家の横顔』（大修館書店）、『文学と風土』（開拓社）、ギュイヤール『比較文学』（白水社）、ヘミングウェイ『移動祝祭日』（三笠書房）、『ホイットマン詩集』（三笠書房）など。

比較文学の諸相

© R. Fukuda 1980

1980年11月1日 初版発行 定価 1,800円

検 印

著 者 福 田 陸 太 郎

省 略

発行者 鈴 木 敏 夫

発行所 株式会社 大修館書店

101 東京都千代田区神田錦町 3-24

電話 (03) 294-2221 (大代表) / 振替 東京 9-40504

装幀 柴田成敏 組版・印刷 千 修 製本 三水舎

はしがき

本書は、ここ数十年間にあちこちの雑誌や新聞、その他の出版物に寄せたさまざまな文章を集めたものである。しかしすべての文章は、何らかの意味で、比較文学に関連したものであるから、期せずして、必然的に、比較文学の諸相を現すものとなった。ここには、比較文学の扱う諸問題を、多少の重複はあるかもしれないが、多面的に、且つ具体例に即して、展開しているつもりである。全体を四部に分けてあるが、もともと諸刊行物の求めに応じて書いたものであるから、どこから読んでいただいてもいいと思う。だが、ここで一応本書の構成について一言しておく。

Iは、比較文学の歩みとその方法論を略述している。方法論と言っても、進展中の学問のこと故、新しい傾向があちこちに見られるので、ここでは、オーソドックスと思われるて来た狭義の比較文学研究法を主として述べておくにとどめた。さらに派生する諸問題については、思いつくままに、トピック別に論じている。

IIでは、外国の視点から日本文学を眺めた類の文章を集めた。内から外を見ることは、従来日本の学者たちの得手とするところであったが、外国人の立場から、日本文学ないし日本がどう理解されるか、という問題にもっと光を当てたいと思うからである。

IIIは、多岐にわたる比較文学研究の現場を瞥見するすがにもと考えて、詩歌の翻訳の臨床例やら、比較文学のしにせと言われるフランスの視点からの研究や、海外における日本の文人の運命や、ジャンル研究の例などをとり上げてみた。

IVは、一国の中で孤立することのできなくなった文学研究の国際場裡における現実の姿を示そうとしたもの。一つは大学での講演筆記が活字になったものを再録したのであるが、他にいろいろな国際会議の報告をのせているのは、世界の学会で何が起こっているのか、その一端を具体的に知ってもらいたいからである。比較文学は、国内的には盛況を示しているにもかかわらず、日本の学者の国際舞台への登場は余りにも乏しい現状である。わが国の研究者たちの実力をもっと国際的に発揮してほしいというのが私の願いである。

最後に念を押しておきたいことは、本書中の文章は、それぞれの時点においての最新の知識にもとづいて書いたつもりであるが、その後何年かたって、事情が変化している場合もありうるということである。したがって、各項目の初出一覧が巻末に添えてあるから、それを注意してごらんいただきたい。逆に言えば、それらの文章が発表された当時の情勢を知るのに好都合なこともあるだろうと思う。これらの文章を発表する場を与えてくださった諸刊行物の編集者の方々に厚く御礼申し上げたい。また、末尾になったが、古い詩友であり、且つ外国文学にも造詣の深い大修館編集部の川口昌男氏から、かずかずの有益な助言をいただいたことを、特に記して感謝の意を表するものである。

一九八〇年十月二十日

福田陸太郎

目 次

はしがき

I 比較文学概観

比較文学の方法

比較文学の意義

比較文学の諸分野

比較文学者の装備

日本の比較文学の歩み

留意すべき諸点

比較文学の諸問題

作家と外国との接点

作家と外国の風土

作家の外国における運命

翻訳をめぐる

作家の見た外国

一国文学の全体像

61 50 35 31 26 21 21 18 15 13 7 3 3 v

II 外から見た日本文学

外国の日本文学研究

世界のジャパノロジスト

日本文学理解の可能性

外国の大学での日本文学講義

スペンダーの日本観

アメリカ人が見た日本文学

シュトラウス氏と語る

サイデンステッカーの新訳『源氏物語』

日本文学の国際性

文学研究の新しい視点

III 現場の比較文学

日本比較文学会の活動

教科書の海外詩と訳詩の鑑賞

142 139 133 129 123 114 108 104 98 93 89 79

大和田建樹の業績をめぐって

ジャン＝マリ・カレ教授の横顔

コメディ・フランセーズの『オセロ』

フランスのホイットマン発見

黄色い日本の犬

叛逆の芸術家サダキチ・ハルトマン

ある日の比較文学的会談

海洋文学

IV 文学の国際交流

国際舞台の文学

文学は国際的にどう流通しているか

文学は国際的に通じるものか

日本文化研究国際会議

ICLAフリブル大会記録

新旧大陸縦断

263 255 251 221 214 213

203 199 192 184 180 172 163 158

F I L L M シドニー大会およびその後
F I L L M プロヴァンス大会報告

初出一覧

索引

288 279

277 269

I

比較文学概観

比較文学の方法

一 比較文学の意義

ふつう厳密な意味で「比較文学」と言われるものは、国際間の文学関係の歴史を調べる文化科学である。一国の文学は、必ずと言っていい位、外国の文学から影響を受け、また他へも影響を与えている。そういう交渉のない国々の間では、こういう比較文学は成立しない。しかし殊に現代のように交通が便利になり、書物が流通し、翻訳等も盛んになっている時代には、孤立した文学というものには考えられない。そこで比較文学の重要性が起ってくる。一つの国の文学史を完全に書くためには、どうしても外国文学との交流を調べねばならなくなる。そういう意味で、比較文学は、国文学史を補足するという大切な任務をもつ。

比較文学の理論にささげられた最初の著書は、一八八六年に出た英人ボズネット(H. M. Posnett)による『比較文学』であり、同年エドゥアール・ロッド(Edouard Rod)はジュネーブで比較文学史

の講義を始め、翌年ドイツではマックス・コッホ (Max Koch) が『比較文学史雑誌』(一八八七一
一九一〇)を創刊した。ドイツ人シュプフレ (Stüpfle) やイギリス人エドモンド・ゴス (Edmund
Gosse) やフランス人デジョップ (Charles Dejob) やエーラル (A. Ehrhard) 等の比較文学的業
績が現れたもの頃である。そして一八九七年にはフランスのリヨン大学において、ジョゼフ・
テクスト (Joseph Texte) が比較文学の正規の教授を開始した。以来この学問は、特にフランスで
栄え、ベツィン (Louis-P. Betz) 、バルダンスベルシエ (F. Baldensperger) 、ランソン (G. Lanson) 、
アザール (P. Hazard) 、ヴァン・チーゲム (Paul Van Tieghem) 、ジャン＝マリ・カン (Jean-Marie
Carrière) 等のすぐれた学者を出した。

リヨンに次いで、一八九九年コロンビア大学に比較文学の講座が創設され、またフランスでもソ
ルボンヌを始め他の大学に続々と比較文学の講座が新設され、雑誌の論説や単行本として多くの研
究が発表されるようになった。そしてこの新しい学問がフランスを中心として欧米各国で発展する
につれて、方法論の上においても色々の傾向が現れてきた。

元来、フランス派の比較文学というのは、先に述べたように、きわめて厳格な実証主義に立つも
のであって、二つの文学の間に実際の具体的な交渉があるときに限り、それを事実にして明らか
にしようとする。だからドーデがフランスのディケンズと呼ばれたり、テニソンとミューセの親近
性が言われても、それぞれの両者の間には現実の関係がなかったのであるから、その比較文学的研
究は成り立たないのである。

またフランス派比較文学は、原則としてルネッサンス以降の時代を取り扱い、古典文学と近代文学との関係なども研究範囲に入れない。つまり、国民的特性をもった文学が現れたのは、ほぼルネッサンス頃であるから、それ以後のことを調べるのが重要な仕事だと考える。また、古典文学は余りにも近代文学の血肉となってしまっているので、両者を分けて貸借を明らかにすることは一応問題外としているのである。

もう一つ、この派の比較文学の大きな特色は文学の審美的な鑑賞批評ということを当面の課題としないことである。すなわち、比較文学を文学史の一部門と考えて、ある作家作品の外国との関係における歴史的な位置づけを行なうのであり、たとえばその後アメリカで盛んになったニュー・クリティシズムにおけるように、作品自体の分析や評価をもっぱら行なう態度と対蹠的な立場をとる。このことに対しては、イタリアのクロッチェ (B. Croce) やファリネルリ (A. Farinelli) 近くはアメリカにいるウェレック (R. Wellek)、アンリ・ペール (Henri Peyre)、レヴィン (H. Levin) 等が文学の本質を離れるものとして不満の意を表しているが、けっきょく、文学の歴史的・外的な位置づけと、審美的・内在的価値の探究とは、二つの相異なる、しかもそれぞれに有意義な分野であって、フランス学派はこの前者をもって比較文学の目的だと限定しているわけである。

以上のような厳密な科学としてのフランス比較文学に対して、アメリカの学風はもっと大らかなもので、前述の狭義の比較文学的研究に加えるに、さらに広い意味の対比を行なっている。それは「一般文学」とも呼ばれているもので、幾つかの文学にわたって共通の事実——ヒューマニズムと

が古典主義とかロマン主義といった大きな思潮を調べたり、古典文学と近代文学との交渉を見たり、あるいはゲーテのいわゆる《世界文学》という觀念に立脚して、大学などに《名著》(Great Books)というふうな課目を設け、世界の偉大な作品を、しかも時には翻訳を通して読ませたりしている。これらのことは、アメリカの諸大学の講義題目を見ると明かである。

ドイツの学者たちは従来好んで《主題史》^{シトマテグロヒヒテ}に従事した。これはポール・アザールなどが、文学の材料に過ぎぬものを扱っても無駄だとして排撃した分野であるが、それでもドイツを始めとして、イタリアやフランス自体でも、興味ある研究をいくつか生んでいる。近来、ドイツは概して、作品を、歴史的ではなく、内面的に考察して、思想に重点をおき、一つの有機的全体としての西歐文学と結びつける方向へ進んでいるようである。

イギリスは、個々の業績は別として、比較文学ということ余り表立って言わず、大学でも比較文学は正式の講座をもっていない。それは一国の文学の研究に吸収されている。しかしわれわれはこの方面に寄与した学者として次のような名前を忘れることはできない。ハーフォード (G. H. Herford)・ロバートソン (J. G. Robertson)・ストレイチャー (L. Strachey)・タウデン (E. Dowden)・セインツベリ (G. Sainsbury)・グリーン (F. C. Green)・コス (E. Gosse)・シモンズ (A. Symons)・エリオット (T. S. Eliot)・モートイマー (R. Mortimer) 等々。なおフランスにおける英文学の耆宿カザミアン (L. Cazamian) がやはり、比較文学を、国文学者が担当すべき一部門であると考えているのは、イギリスにおける考え方とうまく合致する。